



2006.12.28 発行







めんたるねっと

YMSN 情報誌

(特定非営利活動法人)横浜メタサービスネットワーク

第11号

Vol.3 No.3

	医療の現場から	わかりやすい認知機能障害の話 その2	1
	就労の取り組み	地域とのつながり大切に～戸塚区就労支援センター～	3
		雇用に取り組む～光文図書株式会社(大和市)～	5
	SSTの現場から	第11回SST学術集会参加報告	7
	地域の取り組み	病院から地域へ～みなとみらい福祉サービス～	9
		予定・報告	11

わかりやすい認知機能障害の話（その2）

～ 認知機能障害を理解する ～

東邦大学医療センター大森病院 へのまつかつよ 舩松克代

前号からのつづき

4. 認知機能障害の改善

認知機能障害がそれだけ社会的活動との関連が強いとなれば、ここの部分に治療や働きかけがされないといけないではないか！と思われた方もいらっしゃると思います。もちろん精神科領域ではこの認知機能障害は注目されていますし、いかにこれを改善させるかということがトピックスです。

障害を全くなくすということはできません。しかし、障害の程度を軽くしたり、それを補う代用技能を身につけることや認知機能障害が顕著にならない周りの対応の工夫で、生活上の困難を緩和することが可能だと思えます。

それは健康な人でも自分の苦手なことは避けたり、克服できるような何かの案を考えたりすることと一緒にです。

< 薬物療法 >

統合失調症の治療で薬物療法は必須です。最近の統合失調症治療薬の開発では「認知機能障害の改善」というのが主流になってきました。ハロペリドールやクロルプロマジンという定型抗精神病薬からリスペリドン、ペロスピロン、オランザピンなど非定型抗精神病薬という流れに変わってきています。この非定型抗精神病薬は認知機能の改善が望め、社会活動性が向上するという風に使われています。実際にはこれらの非定型抗精神病薬は副作用の出現が少ないので、副作用止めとして使われる抗コリン薬が必要なかったりまたは少量

でいいのです。この抗コリン薬は認知機能を低下させると言われています。ですから飲まなくて済むから認知機能が低下しないといっている論文もあります。また日本ではまだ非定型抗精神病薬の歴史が短いのですが、欧米では様々な薬剤別の認知機能研究が行われていて、どの認知機能障害にはどの薬が改善の度合いがいいかなども発表がされてきています。日本でも最近また新しい非定型抗精神病薬が発売になり、海外の文献では認知機能の改善の度合いが一番良いと言う報告もあるので、注目しています。

< 周囲の働きかけの工夫 >

認知機能障害をよく理解した上で、働きかけるとコミュニケーションが良くなり、理解が促進されたりすることがあります。臨床現場に出たときに恩師から「具体的・断定的に繰り返し、時を逃さず、簡潔に」と統合失調症への働きかけ5原則を教えられました。

これを実行しようとするとうるさく簡単でとても難しいのです。よく研修会などで、「患者さんが指示に従わない」とご相談を受けます。まずは医療従事者としての言葉がけを振り返ってもらいます。よくあるのは曖昧な言い方が患者さんを混乱させ、指示を不明瞭にしているということです。極端に言えば「あの～、それをね、あんなふうに、こうしておいて」のようです。これでは全く通じず、従いようがありません。日常意識しないうちに、

非常に曖昧な表現の会話をしていることに気がついてください。まずは「その、あれ、ちょっとこっちに」というのを「テーブルの上にあるテレビのリモコンを私のところにまでもってきてください」という風に具体的に言う練習を是非してみてください。

< 認知機能リハビリテーション >

最近、脳トレが流行っています。筋肉を鍛えるように脳も鍛えられるといいなと私自身も感じていました。精神疾患では認知機能の低下が指摘されているし、認知機能の回復が出来れば、社会生活の困難さも低くなるのではないかと多くの方が考えると思います。認知リハビリテーションという分野は脳損傷の患者さんに適応していた「神経リハビリテーション」を、精神障害者の認知機能障害の改善を目的に実施されています。

< 認知リハビリテーションワークショップ >

2006年7月26日帝京大学医学部で Susan McGurk 先生のワークショップが開かれ、参加してきました。「精神障害者への認知機能リハビリテーションと援助付き雇用」というタイトルで、6時間の中で、講義と認知リハビリの演習を行い、非常に充実したものでした。私自身待っていました！という内容であったので、是非会員の皆様にも何回かに分けて、お教えいただいたことのエッセンスを紹介したいと思います。

McGurk 先生は心理学者で医学部の助教授をしています。彼女が取り組んでいるのは、「認知機能および職業リハビリテーションの統合」というものです。具体的には就労を目指している人たちに対して、援助つき雇用と統合して「就労のための考える力」というプログラムを作って支援を行っています。行われているのは日本で言えば精神保健福祉センターのような機能を持っている職業セ

ンターといったところでしょうか。具体的には、まず週2回3カ月のコンピューターにより認知機能トレーニングをします。これはパッケージ化されていて、最初はやさしいものから始めて、だんだんレベルが上がっていくようになっています。そして実際の社会生活に準じて作られた技能練習をします。ある希望の仕事を想定し、その場面の中でどのように認知機能が使われていて、認知障害によってどのような職業上のエラーが発生するか、それを防ぐためにはどのような対処をしたらよいかを学習します。

最後に個々に発生する認知機能障害を管理するための対処の教育をします。

このように援助付き雇用と認知リハビリテーションを統合することにより、就労への道が開かれているようです。

この日は長時間にわたり、講義と実際に認知リハビリテーションプログラムをパソコンで体験することができました。

次回号では、実際にどんな認知リハビリのプログラムが行われたか、体験者の私がレポートし、また McGurk 先生の研究からどのような効果が現在見られているのかをご紹介しますと思います。期待は募ると思いますが、続きはまたのお楽しみに！

横浜戸塚 就労援助センターを訪ねて

- 地域とのつながりを大切に -

2006年1月より開設した横浜戸塚就労援助センター（JR 及び市営地下鉄戸塚駅徒歩5～6分）を訪ね、副所長の^{こうかた}甲方裕之さんよりお話を伺いました。

横浜戸塚就労援助センターの母体は、高等養護学校卒業生の親の会であった「こうよう親の会」（1990年設立）が、作業所やグループホーム等を次々に設立運営する中でNPO法人となり社会福祉法人となった「こうよう会」です。

設立当初から会の人たちは、高等養護卒業後就職しリストラなどで離職した人たちに自前で就労支援をしたいという強い思いがあり、それがようやく実現できたということです。

<現在の活動>

開設後最初に行なった活動は06年2月の就労支援講演会で、障がい者の就労・雇用の現状やあり方をテーマに開催しました。企業、教育、行政、福祉関係者、就労支援機関、在学中の障がい者を抱える家族の方たちなど、幅広い参加が得られました（が、この時は正直言って準備不足でした）。

事業の中心は就労相談や就労支援、定着支援ですが、このほかにも外部とのつながりを大切に、地域や企業との勉強会を定期的に行なっています。

企業との勉強会「やじ喜多会」は、戸塚周辺の障がい者雇用を進めている企業の方たちが集まる会です。「人数的にも20人前後と小規模なので、質疑応答も顔を見て話ができるという利点があります。雇用のあり方や雇用後の具体的な問題

等について意見交換をしています。企業と支援者が一緒に話す貴重な機会となっています」と甲方さんは語ります。

地域との勉強会「Jネット かしおぺあ」は、区役所、区社協、地元企業、ボランティア、ハローワークの方たちがネットワークを結び、「障がいのある人が地域社会で役割を持って働き（Job）、社会生活を楽しみなながら（Joy）それぞれの自立をめざしていく...」。そのために「情報を共有し、就労の場の拡大や就労継続、生活支援、余暇支援などを通して、障がいある人の社会参加と環境整備を支援する」会となっています。

定例会では、それぞれの立場からの障がい者就労への関わりや、今後の当事者主体の活動について話し合っています。07年2月には就労した障がい者と、一緒に働いている人が語り合うシンポジウムが予定されているそうです。

仕事のサポートについては、仕事探しから面接、実習まで関わり、就職後に訪問して本人や事業所との調整を行ったりします。事業所から要請があれば、ジョブコーチとして入ることもあるということです。実際には事業所からの依頼は少ないということです。

開設以来11月末までで34人がここを経て就労しました。内訳は知的障がい者32人、精神障がい者2人で、精神障がいの方にも関わりを持っています。

<精神障がい者への対応>

「来られた方にはどなたにも対応しています。

まず2時間ぐらい話を聞いて、連絡を取りながら関わっています。

自分で仕事を探す方が多く、自分で決めてから来る人も多いです。関わりの中身は、履歴書の書き方を一緒に考えたり、『仕事どうだった?』と声をかけたり、家族との調整などです。

知的障がいの人たちの作業室(勉強会)を週2回行なっていますが、精神障がいの人に勧めるのには抵抗があります。別に精神の人向けにそういった勉強会があれば、本人の持つ課題などが浮き彫りとなって、支援もしやすいと思うのですが...。2~3時間の話だけでは弱いところが見えにくくて、本当に困った時にどう支援するかが難しいと思っています。

オープンで働いている人の職場訪問に行っても『上司に挨拶して行きたい...』と言っても、本人から『しなくていいです』と言われてそれできず、本人対応のみということもあります」と甲方さんは、前向きに取り組む姿勢と同時に難しさも語っています。

<今後に向けて>

最後に「精神障がいの方には、生活支援センターでの就労ミーティング情報や『トライ!』(詳細は05年1月第3号に)を紹介しています。また、精神障がい者の支援機関とも情報交換ができればと考え、地元の支援機関との交流を少しずつ進めています。

スタッフについても、精神障がい者と深く関わった経験のある人がぜひ必要だと思っています。そういう人がいないために、本人への正しい評価ができないことがとても残念です。自分としても精神障がい者へのサポートができるように研修会などに参加して勉強し、何より経験を積みたいと思っています。

知的障がいの方の就労については、働ける人が少なく売り手市場の状況です。就労移行型の施設とうまく連携をとって、働ける人を育てていきたいですね。それとやはり定着支援。いろいろと職場でのつまずきがありますから」と甲方さんは話されています。

戸塚という地域性やつながりを大切にしながら、相談に来られた方にできるだけ良いサポートをしたいという思いや意欲が強く感じられました。

(YMSN 森川充子)

横浜戸塚 就労援助センター

横浜市戸塚区戸塚町4111 ヨシハラビル2階

電話 045-869-2323

FAX 045-865-3172

利用日時 平日(月~金) 9:00~17:00

利用対象者 横浜市在住の障がい等ある方

企業の方、ご家族の方

利用をご希望の方は前もってお電話ください。

精神障がい者の雇用に取り組む事業所に聞く

光文図書株式会社

光文図書株式会社(光文書院大和流通センター)では、現在6名の精神障がい者の方が働いています。

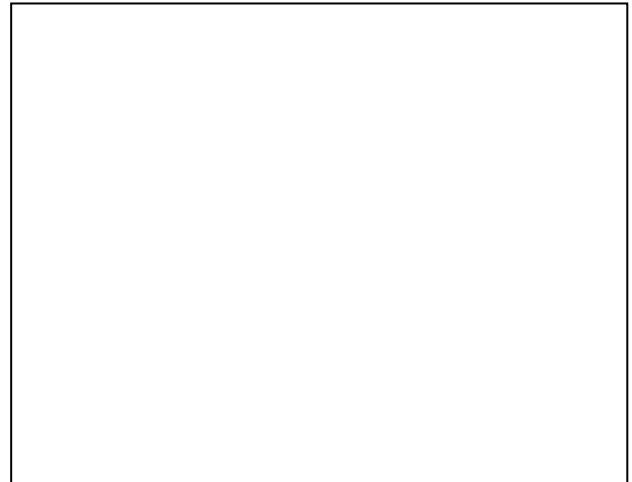
雇用のきっかけとなったいきさつや、配慮点等その取り組みについて木村利明部長・松沼憲次課長にお話をうかがいました。

<精神障がい者雇用をはじめたきっかけは？>

4年前に高等養護学校の知的障がい者の実習を長期で受け入れたことで障がい者を受け入れるきっかけができました。また何らかの形で社会貢献をしたいと考えていたこともあり、精神障がい者を雇用していただけないかと話があった時に受け入れを決めました。

<どんな仕事をしていますか？>

会社の業務は図書教材教具製造・発送業務です。精神障がい者の方の仕事は配属されている階によっても異なりますが、1階では図書の箱詰めや本等を積み上げる作業。また製本の部署では結束機や折機に印刷物をセッティングする作業があります。2階では伝票を見て品出しをしたり、アッセンブリ(例えば書道に必要な道具を容器に組み入れセットする等)を行っています。3階ではシールの袋詰め。シールを数枚でセットし袋詰めしていきます。作業が単一でなくいろいろなものがあり(発送作業からアッセンブリのようなセット作業等)また、1年間同じような作業がありますので、取り組みやすさがあります。



<精神障がい者を雇用してメリットはありますか？>

慣れるまでに時間がかかることはありますが、相対的に真面目な人が多いので、仕事を覚えられれば戦力になります。また、1点だけに仕事を絞ることで、忠実にこなしていく良さがあります。

<雇用に当たって配慮や留意している点はどんなことですか？>

勤務時間や出勤日数は、本人の希望で1日4~5時間、週4日というように、無理のないペースで始める場合が多いことです。特に通院、服薬は大切なので通院日は優先して無理して出勤することがないように配慮しています。本人が希望していればジョブコーチ制度も利用しています。

また、仕事上では、個人差もあると思いますが、数を数えることが得意でないようなので、必要上数えなければならない時は追われないよ

うに配慮しています。



<特に大変あるいは苦労したことはどんなことですか？>

勤務時間が周りの人よりも短いため、作業時間の組み立ても大変で現場の担当者がなかなか慣れず苦労した経過はありますが、最近慣れてきて特に問題ではなくなっています

また最初はアルバイトの人と一緒にやってもらい慣れてくれば一人でやってもらうようにしています。アルバイトの方に任せていてもつきっきりというのは困るので、こちらが「ゆっくりでよいから正確にやってください」と指示を出すこともあります。

慣れてきた頃一つの仕事を責任をもってやってもらおうようにしたことがあります。本人は仕事をこなせていたのですが後でそれが負担になっていたことがわかりました。

ただ、最初の頃のように神経は使わず今はやれています。

<最後にこれから採用を考えている会社へのメッセージをお願いします>

雇用してみると精神障がいのある人がたくさんいることがわかりました。積極的に働く場を提供していく必要があると思います。働いてもらえば、苦労するだけの甲斐はあります。

また実習や研修から受け入れていくと周りの人も慣れて違和感がなくなります（2年前からこれまで、精神障がい者の実習は2週間から1カ月の期間ですが、25名程受け入れてきました）。

その人に仕事の合う合わないということもあると思いますが、先ず受け入れてやっていくべきではないかと思います。やってみると何とかなります。

（YMSN 森川充子）

メンタルヘルス予防講座

日程：2月4日（日）10:00～16:00

場所：ウィリング横浜 901 研修室 オフィスタワー 9階

（京浜急行・横浜市営地下鉄「上大岡駅」徒歩2分）

講師：水野康弘（帝京大学付属溝口病院精神神経科 臨床心理士）

- ・ セルフチェックして頂き、自分のストレスを見分け、自分にあった対処方法を見つけられる事を目標にしています。
- ・ 認知療法等を紹介します。

SS Tの現場から

演題発表に「ベラック方式」が独立して分科会に

- 「第11回SS T学術集会」参加報告 -

12月1日(金)・2日(土) 名古屋国際会議場において今年も学術集会が開催されました。今回私は演題発表にエントリーしての参加となりました。今年はなんと演題発表に「ベラック方式」が独立してカテゴリ化されたのです。ここ数年は全国経験交流ワークショップの分科会でも「ベラック方式」が何度も取り上げられていることもあり、急速に普及していることを実感しました。私も「ベラック方式」カテゴリでの発表となりました。

ただ私個人としては「ベラック方式」に興味をもち、実践を重ねてきた一人として「ベラック方式」が注目されることは非常にうれしく思う反面、リバーマンのSS T(生活技能訓練)とは全くの別物であるかのようにあまりにも極端に区別化されることには若干の危惧も感じます。リバーマンの言う「基本訓練(モデル)」とはSS Tのトレーニングの手順をまとめあげたものであり、ベラックたちの方式においてもその点は原則的には違いがないからです。そういった複雑な思いを抱きながら(そして緊張しながら・・・!!)の学会参加となりました。

「ベラック方式」の発表会場にはとても多くのオーディエンス(聴講者)が集まってくれました。このことから「ベラック方式」への関心の高さが窺われます。

最初は国立病院機構の方による自傷他害などの問題行動をもつ人たちへの「ベラック方式」によるストレスコーピングの試みの報告でした。非常に難しい問題に対してアセスメントに基づいた課題選択を慎重に行われている感じが感じられ、これからの医療現場において非常に重要な取り組みへ発展していくものと思われました。

次がいよいよ自分の発表。私はベラックらが作成した構造化されたアセスメント面接ツール

「社会生活状況面接」を用いて(ちなみにリバーマンたちはまだ翻訳されていませんが

「CASIG」というやはり構造化されたアセスメントツールを作成しています。ということはリバーマンもベラックもアセスメントを非常に重要視していることになるわけで、SS Tの枠組みとしてやっぱり違いはないと思うのです。グループのカリキュラムメニューをいかに作成するかについてや、そういった準備作業の重要性について、またメニューに基づいたロールプレイトの作成・実施・評価のトライアルを報告しました。12分という限られた時間(短い!!)ではありますが、これまで積み重ねてきた実践が少しはお伝えできたかなと思っています。

翌日の池淵恵美先生の特別講演でもSS Tの効果指標の1つとしてロールプレイトのことが取り上げられていました。効果測定という作業には多くの制約や限界もありきわめて難しいものである、というお話に納得。その中でもロールプレイトは手間ひまはかかるけれど、個体間の比較あるいは前後比較がしやすく、対象に応じたテストを作成することが可能で、さまざまな要素に分解して評価できるというメリットをもつツールであるとのお話もあり、今後私もロールプレイトに関しては引き続き取り組んでいこう!という気持ちになり、とても励みになりました。3番目は、いつもSS T研修会で世話になっているYMSNのみなさんが実施している、職場適応・職場定着を目標としたSS Tグループの発表でした(連名にさせていただき、ありがとうございます!)。私は実際のグループも数回拝見しているので、とても生き生きとイメージしながら聞くことができました。就労現場での応用力をつけるために必要

なスキルを選択したカリキュラムメニュー作りがすばらしいと感じました。UCLAのモジュールでも Workplace Fundamentals Module (未翻訳)という就労維持を目標とした学習パッケージがあり、これから特にニーズが高まる領域だろうと思いました。そして4番目は埼玉精神神経センターデイケアでの、認知機能障がいとさらに重篤なメンバーに対する、週3回・20分という、短時間だけれど高頻度のセッションの実践報告がおこなわれました。日本でのSSTは、マンパワーや診療報酬の問題もあるのでしょうけれど、まだまだ週1回というのがオーソドックスです。しかしリバーマンもベラックも「頻度は週2回から4回が普通、最低で週1回」という言い方をしています。この発表は非常に興味深いとともに、私たちが日ごろ陥りがちな「グループがすでにあってそこにメンバーをあてはめようとすることによって起こりがちな行き詰まり」にハッと気付かせてくれるものでした。

私も最近週2回のセッションを実施してみてその手ごたえを感じ、またメンバーの学習意欲の高さに驚かされる体験をしました。日本でもだんだん頻度の高いセッションがひろがっていったらどんなにいいだろう、と少々楽しい空想にふけったりしていました。質疑応答の時間が短く(3分しかない!!)しかも会場が広く参加者が多かったためか(うれしい悲鳴とはこのことです)なかなかフロアの方々とのディスカッションが展開されなかったのは残念きわまりないのですが、終了後何人かの方が感想を伝えにきてくださり、連絡先の交換ができたのはとてもうれしいことでした。

翌日は「福島医大版服薬自己管理モジュール」について(早速購入してしまいました!)や、埼玉精神神経センターデイケアのバージョンアップした「食習慣改善モジュール」など、オリジナリティの高い取り組みの発表を中心に

聞くことができました。どちらのモジュールも非常に完成度の高いもので、今後ますますのニーズの高まりとともに、プログラムそのものがさらに洗練され、発展していく期待を感じるものでした。

今回久しぶりに演題発表にエントリーしてみ、当日の発表は実に短い時間だけれど、そこに至るまでの準備の大変さや苦勞に自分自身改めて気付きました。また苦勞しながらも自分の実践を振り返り、今後の課題を明確にする貴重な機会となったこと、予演会やその他の準備の段階で多くの人から助言や励まし(ポジティブフィードバックがこれほどありがたいと思ったことはありませんでした)をいただいたことの心強さをかみしめつつ、おそらくそれぞれの発表者が多かれ少なかれ私と似たような体験を経て当日を迎えたのではなからうか、と思ったわけです。発表者それぞれの苦勞に思いをはせたときに、やはり発表の場に立ったことそのものへの努力や熱意に対するある種の敬意であるとか、まずは肯定的なフィードバックを伝えようとする(その上で助言などいただければ本当にありがたいはず)あたたかさといったものを、聴く側の姿勢として持つべきではないか、自分は今後そうありたいなあ、というふうなことも今回の学術集会に参加して思ったことの1つです。

初日は名古屋コーチン、2日目にはきしめん、手羽先、味噌カツ、学会終了後の日曜には名古屋港のイタリア村にて釜焼きピザとワインで乾杯!というわけで(食べ過ぎ!?)さまざまに名古屋を満喫した旅でもありました。脳みそもおなかもエネルギー充填して、またこれからメンバーたちとともにSST実践、そして努力(まさにステップ・バイ・ステップ!)の日々です。

(東京武蔵野病院 臨床心理科 佐藤幸江)



地域の取り組み

病院から地域へ起業

～ 株式会社みなとみらい福祉サービス（横浜市磯子区）を訪ねて～

2006年7月31日に登記登録を終了し、正式に株式会社みなとみらい福祉サービスは設立されました。自宅の1部屋を事務所としている会社に訪問しました。当日は事業管理者である松井次郎さん（精神保健福祉士）とサービス責任者である倉持桂子さんにお話を伺いました。

事業内容は、主に精神障がい者の方への居宅介護サービス（以下、ホームヘルプ）と移動支援（以下、ガイドヘルプ）の実施です。現在登録ヘルパーが7人（女性2人・男性5人）、事務担当者が1人のスタッフで運営しています。登録ヘルパーは全員ヘルパー2級資格者です。実際に事業を開始したのは自立支援法の施行時期の関係で、10月1日になりました。訪問したのが12月7日だったので、稼働して2カ月過ぎたばかりでの取材となりました。



設立動機は...

設立者であり事業管理者である松井さんに、株式会社としてホームヘルプサービスを開始したきっかけを伺うと、「精神科単科の病院で精神

保健福祉士として働いていましたが、地域で暮らし続けるために必要なサービス提供をしたくて病院を退職し、会社を設立しました。精神科医師である荻野彰久先生の協力もありましたので、迷わず起業したわけです。それと以前、横浜メンタルサービスネットワークの情報誌『めんたるねっと』で、当事者でありながらホームヘルプサービス業を運営している大石洋一さんの記事（めんたるねっと2004第1号）を読んで影響を受けたことも大きいです」と話してくれました。また、株式会社にした理由は、将来違った事業も展開できるようにと考え、先を見た選択だったようです。

現在の稼働状況は...

現在2カ月過ぎた段階で、利用者が6人。いずれも男性。「男性スタッフが多いので、役所から男性の依頼が多くなってしまおうんですかね」と笑いながら話してくれました。サービス提供の内容は、主に一緒に家事をする「身体介護」の利用が多く、ヘルパーがやってしまわないで、「一緒に実施する」という支援は、ヘルパーが家事をやり過ぎないという見極めが難しいと、どのヘルパーさんも感じているそうです。

家事を代わりに実施する家事援助が30分848円なのに比べ、一緒に実施する身体援助が30分2,438円です。困った例ということで、松井さんは、「利用者と契約を結んでからのヘルパー実施ですが、利用者は説明を受けても、『ヘルパーが家事をやってくれるもの』と思い込んでいて、『何で自分が一緒に家事をやらなければいけないのか』と問いかけられ、折り合い



をつけるのに苦労したこともあります」と話しています。

サービス提供責任者でもあり、利用者のお宅へヘルパーとして出向くこともある倉持さんは、以前、身体障がい者の方のヘルパーをしていた経験を踏まえ、「身体障がい者の方への支援では障がいがかかりわかったので、支援しやすかったのですが、精神障がい者の方は、見ただけではわからない障がいなので、よりきめ細やかな感受性が要求される気がしています。他のヘルパーも同様に感じているようです」と違いを話してくれました。一方、「一緒に家事をしていくと、こちらの誠意をキャッチしてくれ、利用者さんが心から喜んでくれることも多いので、そんな事を伝えられるとうれしいですね」と話され、ヘルパー同士の情報交換や研修についてなど、今後の課題だろうと締めくくられました。

今後のプランは...

最後に、松井さんに、今後のプランについてお聞きしました。「若い方の利用を進めていきたいと考えています。特に自宅にひきこもっている方にガイドヘルパーを利用してもらいながら、外出機会が増えることへの支援や、グループホームまで支援がなくても生活できる方の寮を作り、ホームヘルパーをうまく活用できるシステムを作り上げたいと思っています」

訪問して感じたこと

精神障がい者の方への支援の難しさの特徴なのでしょうか？ いつも同じ「一緒に実施する」という計りでは、体調や気分の悪さから、家事をするのに体の動きがついていけない今日の利用者(精神障がい者)に、ヘルパーがどう察し、「一緒に実施する」を実行できるのでしょうか。お話を伺いながら矛盾と戦っているヘルパーさんの姿を想像してしまいました。

また、あいまいな判断が苦手な精神障がい者への契約事項についても、障がい特性に見合った文言を利用するなどの工夫を要請するなど、今後の行政への提案も検討していく必要もあるのではないかと感じました。

みなとみらい福祉サービスを訪問し、精神保健福祉士の視点でホームヘルプサービスを展開していることが、今までの地域にはない形なのかと感じました。お話を伺う中で、病院から地域へと起業している松井さんの静かな情熱を感じさせてもらいました。

(YMSN 鈴木弘美)

研修会のお知らせ

精神保健福祉研修会	参加費 1回	500円 (年間4,000円)
日 時 :	毎月第2金曜日(9月・12月休会 全10回) pm. 7:00~8:30	
場 所 :	ひまわりの郷 横浜市港南区 上大岡オフィスタワー4階	
内 容 :	ホームページをご覧ください http://forest-1.com/ymsn/	
S S T (生活技能訓練)研修会	参加費 1回	1,000円 (年間7,000円)
日 時 :	毎月第3木曜日(8月・12月休会 全10回) pm. 7:00~9:00	
場 所 :	横浜市総合保健医療センター 講堂 研修室	
全体会 :	「事例から学ぶSST」 ~ アセスメントに焦点を当てたSST~	
分科会 :	A.リーダー体験初級コース B.リーダー体験経験者コース C.ベラック初級コース D.ステップバイステップ初級コース E.スキルアップコース	

当事者のためのグループ活動のお知らせ

詳細は各支援センターへお尋ねください

就労講座	港南区生活支援センター	毎月第3木曜日(原則) pm. 2:00~3:00
	神奈川区生活支援センター	毎月第2土曜日 pm. 2:00~3:00
就労フォロー アップミーティ ング	港南区生活支援センター	毎月第1土曜日 pm. 2:30~3:30
	神奈川区生活支援センター	毎月第4日曜日 pm. 2:00~3:00
	Y M S N	O B会の開催
S S T	港南区生活支援センター	毎月第3土曜日 pm. 2:00~3:00

電話相談

毎週木曜日(1回/週) 10:00~15:30
相談専用電話 045-841-8294

会員について

会員を募集します。YMSNの活動を応援していただける方は会員になってください。(会費 正会員年間5,000円)
会員は、研修会(上記案内)への年間参加費が割引になります。
精神保健福祉研修会(1,000円) SST研修会(3,500円)
会員へは、情報誌が無料配付されます。

正会員5,000円(個人) 賛助会員12,000円(団体)
(正会員・賛助会員にはYMSN情報誌を無料配付)

振込先: 郵便振替口座 00250-6-71607
横浜メンタルサービスネットワーク

季刊 YMSN情報誌 Vol.3 No.3

めんたるねっと2006第11号 2007年1月5日発行
間購読料1,000円(年4回発行) 1冊頒価300円

発行: NPO法人 横浜メンタルサービスネットワーク
理事長 武井昭代 編集代表 森川充子
〒233-0001 横浜市港南区上大岡東2-42-4
TEL 045-841-2179
FAX 045-841-2189
<http://forest-1.com/ymsn/>
e-mail: ymsn@forest-1.com

印刷: 横浜市総合保健医療財団
精神障がい者授産施設 港風舎印刷